

令和2年 北海道小学校長会 地区活性化支援事業【実践事例レポート】

- 1 報告地区 : 上川地区
- 2 事例報告学校名 : 名寄市立中名寄小学校
- 3 報告者職・氏名 : 校長 小林 勝彦
- 4 キーワード : 体力向上

1 はじめに ～「はだしの学校」～

中名寄小学校は、名寄市街地から南東約8kmに位置し、山林や河川、田園が広がる豊かな自然に囲まれた小規模校である。昭和62年の外断熱工法を取り入れた校舎改築を契機に「はだしの教育」が始められ、子どもたちは居間に集う家族のような雰囲気、日常の学習に取り組んでいる。はだしの教育は、健康面での自己管理能力の育成や運動意欲の向上、はだしから生まれる解放感により子どもたちの豊かな感性に好影響を及ぼしている。

平成11年度より、通学区域外就学制度（特認校）の指定を受け、地域の教育資源を活用した特色ある学習活動を通し、豊かな心身の育成を望む家庭の子どもたちが、名寄市内の広範囲から通学している。

今年度は、新学習指導要領全面実施に合わせ、学校教育目標を改定し、必要感と目的意識をもって学習に取り組む子どもを育てること。どのような場面でも「価値付け」を意識し、子どもたちに自己有用感そして自己肯定感、ひいては自尊感情を醸成する教育活動を推進している。

2 体力向上の取組 ～全校体育～

本校は、令和元年度より、校内研究の窓口を「体育科」とし、全児童の体力向上を目標に研究を推進してきた。「運動に親しみ、体力に自信をもつ子どもの育成～運動やスポーツとの多様な関わり方について考えることを通して～」を研究主題に、進んで体を動かし、運動やスポーツを通じて、互いにかかわり合い、高め合う子どもの育成を目指している。

小規模校の本校は、マット運動や跳び箱運動などの器械運動では、子どもたちが場や器具に触れる回数はとても多いという利点がある。反面、ボール運動（ゴール型・ネット型・ベースボール型）のような、ある程度の人数を必要とする種目は、ゲームを成立させることが困難である。また、当然のことながら子ども同士のかかわりや伝え合う場面が固定化する傾向にある。

それを打開する一つの手立てとして、今年度より、学年の枠を取り外し、全教職員で全児童の体力向上に向けた組織的な取組を推進している。年間を通じ「全校体育」と「学級(学年)体育」を計画的に組み入れる教育課程を編成した。

【跳び箱】単元の指導計画及び評価計画

時数	1 全校	2 全校	3 学級	4 学級	5 全校
学習内容	1準備運動 2オリエンテーション 3技の説明 4練習の場の説明 5課題把握のための練習 6振り返り	1準備運動 2個人の課題の確認 3練習の場を選択し、練習を始める 4振り返り	1準備運動 2個人の課題の確認 3練習の場を選択し、練習を始める 4振り返り	1準備運動 2個人の課題の確認 3練習の場を選択し、練習を始める 4振り返り	1準備運動 2個人の課題の確認 3練習の場を選択し、練習を始める 4技の発表会 5振り返り
【評価の観点】	【思考 判断 表現】 【主体的な態度】	【思考 判断 表現】 【主体的な態度】	【知識 技能】 【主体的な態度】	【知識 技能】 【主体的な態度】	【知識 技能】 【思考 判断 表現】
評価規準	前項の評価規準を参照ください。				
評価方法	観察 ワークシート	観察 ワークシート	観察 ワークシート	観察 ワークシート	観察 ワークシート
研究との関わり	指導内容の体系化 仮説1 練習法や練習の場を提示し、学習の見通しをもたせるようにする。 <視点3>	自分の課題にあった練習の場を選択させ、スモールステップで技能の習得を図る。<視点3>	自分の課題にあった練習の場を選択させ、スモールステップで技能の習得を図る。<視点3>	自分の課題にあった練習の場を選択させ、スモールステップで技能の習得を図る。<視点3>	技の発表を行い、技能の定着度を評価する。 <視点3>
	学び方の育	友だちの上手な所を考えさせ、どのようにすれば技能を向上できるかを交	友だちの上手な所を考えさせ、どのようにすれば技能を向上できるかを交	友だちの上手な所を考えさせ、どのようにすれば技能を向上できるかを交	友だちの上手な所を交流し、単元を通じた振り返りを行う。 <視点2>

全校体育と学級体育をバランス良く組み合わせる

併せて学年の発達段階を考慮しながら、学習する全種目の「知識及び技能」に関する独自の「評価規準」を作成した。「評価規準」は、新学習指導要領解説「体育編」や「指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料（国研）」を元に、低学年・中学年・高学年ごとに作成し、指導者によって評価にブレが生じない工夫をしている。

全校体育の場合、指導者が複数名いることから、種目によっては学年の発達段階や、個々の課題に対応した豊富な練習の場を設定するようにしている（写真1）。また、ワークシートを効果的に活用し、毎時間、目標や課題、振り返りを記入させることで、全ての子どもたちに目的意識を明確にもちながら学習に取り組む習慣が定着した。種目によっては、課題解決に向け他者と対話することを通して、自己の思考の広がりや深まりを求める学習活動を展開している。高学年が低学年に技術的なアドバイスをしたり、低学年からの称賛を高学年が受けたり、異学年だからこそ生まれる多様なかわり合いが、学習の効果を一層上げている。その他、種目によって指導する担当者をバランスよく分担し、次年度以降も使用できるよう発達段階に応じたワークシートを蓄積したり、ICTを活用し効果的に評価に取り入れたりする等の工夫をし、指導の質の向上にも繋げている。

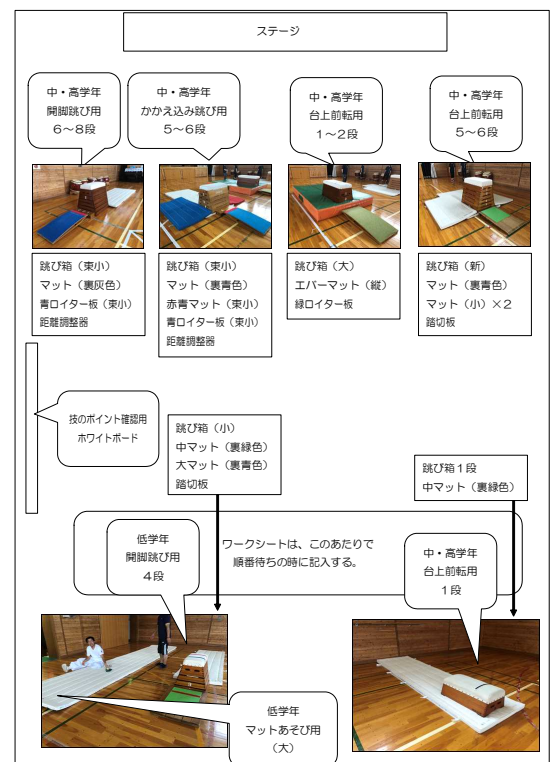


写真1：「跳び箱」豊富な場の設定

3 家庭・地域との連携協働、運動習慣化の取組

Nスポーツコミッション(名寄市スポーツまちづくり団体)、名寄市スポーツ合宿推進課、保護者等と連携し、走力トレーニング、スキー（アルペン・クロスカントリー）、パラリンピック競技等の各種スポーツの学習機会を設定している。プロのスポーツトレーナーやオリンピックメダリスト、パラリンピック競技指導員等の質の高い指導を受けることは、子どもたちの貴重な体験のみならず、教員の資質向上にも繋がる取組となっている。また、「新体力テスト」で得点の低いテスト項目を洗い出し、改善に繋がる指導法やトレーニング方法を取り入れ、チャレンジタイム（中休み）を活用し、子どもたちに再チャレンジする機会を与えることで、次年度への意欲付けも行っている。チャレンジタイムは、その他、「単縄」「持久走」「一輪車」「クロスカントリースキー」等の取組を年間を通じて計画的に活用することで運動習慣の定着を図る時間となっている。

4 おわりに

新体力テストデータ（結果）の経年変化からも明白であるが、本校の取組は児童の体力向上に確実に結びついている。更に、実感できることの一つとして、子どもたちの中に、何事にも最後まで頑張ろうとする意欲が醸成されていることがあげられる。それは多くの学習にも影響を及ぼし、ひいては学力の向上にも繋がっていると思う。体力と学力の因果関係のエビデンスを提唱している学者もいるように、この両者には少なくとも相関関係は存在すると私は確信している。

今後も少人数指導の利を活かし、全教職員で知・徳・体のバランスのとれた子どもの育成を目指し、魅力ある教育活動を展開していきたい。